

冬から春への大学美術館 2003.12>>>2004.3

大藪雅孝退官記念展

教育理念・造形理念の集大成

中島千波

芸術創作ならびにデザイン教育を四十年間にわたり実践実行してきた大藪雅孝は、その過程で多くの芸術家やデザイナー、教育者を送り出している。教育理念と美学を若者たちにたたき込んだことがそれを大いに物語っている。また、自身の創作意欲は時代とともに呼応し前衛的作品群を発表しつづけ、今日に至り独自の造形を確立している。

助手から教授を務めあげられる中で、さまざまな大学内での変革を成し遂げる多忙さは真に大変なことと思われるのだが、自己確立と創造性の貪欲さは他に優るものはないといえる。

この度の退官展では、教育者としての面と芸術家としての一面を展覧し大藪雅孝の思考回路と芸術哲学を観てもらいたいと願っている。

特に大藪哲学の基本理念が「芸術の土台と骨格はデザインに在る」ということである。普遍的な造形は種々さまざまに造形感覚を教育することにより、あらゆる芸術分野に対応できることなのである。この教育理念を実践し教鞭を執る行為が実作

においての実現化となっている。そして今回の作品と自身のアトリエと身の回りに在るものたちは大藪芸術の造形理念の集大成である。
(なかじま・ちなみ/美術学部デザイン科教授)



「芸大コレクション展 特集展示1 赤松麟作とその周辺」展

新聞公子

赤松麟作(一八七八―一九五三)の代表作「夜汽車」は、夜明けに向かっていた走る夜汽車と、活力に満ちた三等車の乗客を描いて、明治という積極的な時代の性格をささも感じさせる。この一作により、東京美術学校西洋画科を卒業して間もない弱冠二三歳の赤松は、明治美術史に不朽の名をとめることになった。本年は赤松麟作没後五十年にあたるので、大学美術館では、このような早熟な画家の出現の背景をも含めて、その全業績を回顧する企画をたてた。

東京美術学校に西洋画科が開講されたのは明治二十九年九月であるが、赤松は明治三十年二月に臨時試験を受けて入学した。第一期生に遅れること五カ月、実質的には一期生に等しい。そしてこれはあまり知られていないことだが、一期生二人のうち半分は東京の黒田清輝と大阪の山内愚僊の門下生だった。準一期生の赤松も大阪育ちで山内門下である。

そこで本展はまず、山内愚僊という今日では忘れられた洋画家を始め、赤松の教師や級友の作品に光をあて、「夜汽車」誕生の背景を考察する。次に卒業後の中学教師時代と大阪朝日新聞社の挿絵記者時代、さらに新聞社をやめて画塾を経営しつつ自らの芸術を追求していった時代を追う。最後に晩年、水墨絵巻をも得意とした文人としての赤松を紹介する。これらの展示の総合から、おのずとたち現れる赤松麟作の人間愛に満ちた世界を楽しんでいただくと同時に、かならずしもよく知られてはいない赤松の

長い画業に、認識を新たにしていただきたいと意図している。なお、当大学美術館の設立に際し、格別のご配慮をくださった当時の文部大臣赤松良子氏(赤松麟作の令嬢)には、今回の企画にも多大のご協力をいただいたことを付記しておく。
*併設・特集展示2「平柳田中とそのコレクション」
(にいせき・きみこ/大学美術館教授)



赤松麟作「夜汽車」1901年 キャンバス・油彩
161.0×200.0cm 藝大美術館

展覧会予定

(2003.12~2004.3)

大学美術館本館

芸大コレクション展:特集

1 赤松麟作とその周辺

2 平櫛田中とそのコレクション

12月12日(金)~2004年2月8日(日)

入場料300円

大藪雅孝退官記念展

1月22日(木)~2月8日(日)

入場無料

第52回卒業・修了制作展

2月21日(土)~2月26日(木)

入場無料

陳列館

博士研究発表展

12月~1月

取手館

美術学部取手校地 アートバス取手

12月

入場無料

開館時間は、いずれも10時~17時。月曜日休館。ただし月曜日が祝日の場合、開館することがあります。

展覧会の名称・会期については、変更することがあります。

本学には駐車場はありませんので、お車での来館はご遠慮ください。

展覧会についてのお問い合わせ

東京芸術大学美術館

Tel.03-5685-7755

NTTハローダイヤル

Tel.03-5777-8600

展覧会の紹介は、下記ウェブサイトでご覧になれます。

<http://www.geidai.ac.jp/museum/>

(左)「遠山無限・碧層々 黄山

清凉台」153.2cm x 170.0cm

(右)「巨雲抱幽石 黄山排雲亭」

153.2cm x 170.0cm



赤松麟作「裸婦」昭和初期 キャンバス・油彩 60.1×80.5cm 大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室



赤松麟作「孔雀」1894年 布・油彩 二曲一隻屏風 116.8×116.8cm 大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室



山内恩僊「静御前」1897年 二曲一隻屏風 140.2×150cm 大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室



楽琵琶



笙



竜笛

芸大美術館の収蔵品は、なにも美術の分野に限ったものではなく、音楽関係のものもある。それらのなかから、雅楽器の逸品と装束をコンサートで紹介する。

専門家（雅楽の楽器製作者・修復家・音楽学者）の調査によると、いずれも名工の手による逸品ぞういであり、ただ資料倉庫に眠らせておくにはいかにももったいない。楽器といつものは演奏されてこそ本来の生命を吹き込まれ、演奏されてこそいっそう響きの美しさを増してゆく。美術館の箱に収められていた雅楽器のいくつかを実際に音を出したみたところ、在りし日もかくやと思われるほど優れた音色ではないか。数百歳になる楽器たちが眠りから覚めるのである。

美術館所蔵の楽器で、今回、コンサートで実際に使用するのは笙、篳篥、竜笛、和琴、楽琵琶など九種類。それに「陵王」の舞装束である。いずれも、江戸時代、あるいはそれ以前に製作されたものである。いくつかを紹介すると、まず笙は真竹の材質が素晴らしい、保存状態もすばらしい。形は多少大振り、時絵の部分は、美術品としても感嘆に値する。竜笛も、竹の材質はとびきりで、むだな力を入れなくても良い音色がする。また、和琴は年月を経た枯れた音色が魅力である。楽琵琶は楽器を包む袋からして、並のものではない。紫の絹地に金糸銀糸で胡蝶が刺繍されている。槽（胴の裏のこ）には紫檀の一枚板を使つて、驚沢である。「陵王」の装束は、きめ細やかな織りと丁寧な刺繍による。その草木染めの上品な色づかいと厚みのある唐織

は、時を超えて生きる匠の技を感じさせる。演奏曲目は次のようである。

第一部：秘曲「啄木」 管絃「双調調子」、「賀殿意」

第二部：舞楽「陵王一具」、「長慶子」

聴きどころとしては、第一部の「啄木」は珍しい楽琵琶の独奏曲で、三秘曲の一つ。遣唐使藤原貞敏が、唐の琵琶の大家藤承武より伝えたといわれる。「啄木」はキツツキのことで、そのため曲中に楽器をコンコンと叩く変わった奏法が出てくる。秘曲の伝授には厳しい掟があつて、その掟を破つて「啄木」を演奏したため鴨長明が都を追放された話は有名。雅楽の世界では琵琶は格式の高い楽器とされ、かつて琵琶を所有できなかったのはごく限られた地位の高い人々であった。本コンサートの秘曲「啄木」で使用する楽琵琶には、「瀆名」という銘が入っている。

「双調調子」は、演奏曲の調の雰囲気を満たし、整えるために奏される。通例、舞楽で舞人が登場するときに管楽器のみによって演奏される。しかし今回は古式に則り、絃楽器も加えて演奏する。これは、雅楽界では「通」の趣向である。

現在、和琴は神楽・東遊など日本古来の歌舞のみに用いられ、唐楽で用いられることはない。平安時代には管絃にも用いられていたがやがて省かれるようになり、江戸時代に一部の好事家によって再興された。その中心人物は八代将軍吉宗の三男田安宗武。彼は膨大な楽書・楽譜を集め、自ら編曲・復曲にも手を染めた。田安の息子の松平定信も雅楽を好んだ。芸大附属図書館に

コンサート 楽器シリーズV 藝大美術館所蔵の銘器 〜眠りから覚める雅楽器の逸品と装束〜 巨匠が作った雅楽器を中心として

瀧井敬子

奏楽堂演奏会予定

(2003.12~2004.3)

定期演奏会・特別演奏会予定

12月1日(月)
芸大定期吹奏楽第69回

12月2日(火)
芸大定期邦楽第67回

12月6日(土)
"うた シリーズ 第3夜

12月14日(日)
ピアノシリーズ2003(プロコフィエフ
没後50年 連続演奏会) 第3日

2004年2月12日(木)
モーニングコンサート第12回(作曲・ピ
アノ)

2月12日(木)
芸大定期室内楽第30回第1夜

2月13日(金)
芸大定期室内楽第30回第2夜

2月20日(金)
東京芸大チェンバー・オーケストラ
第2回定期演奏会

2月22日(日)
楽器シリーズ
「藝大美術館所蔵の銘器」
～眠りから覚める雅楽器の逸品と
装束～

3月16日(火)
上野の春～芸大教官演奏会～
第2回



稜王の装束

平成15年10月31日現在の予定表です。
今後、演奏会内容、日程などについて
は、変更することがあります。

演奏会の曲目、開演時間などの詳細に
ついては、決定次第、大学ホームペ
ージで発表します。
<http://www.geidai.ac.jp>

本学には駐車場はありませんので、お
車でのご来場はご遠慮ください。

チケットの取り扱い
チケットぴあTEL0570-02-9990 / 東京
文化会館チケットサービスTEL03-
5815-5452 / 東京芸大大学美術館ミュ
ージアムショップTEL03-5685-1176

上記の演奏会のほか、「学内演奏会」「卒
業演奏会」の日程については、下記に
お問い合わせください。
演奏会のお問い合わせ先
演奏芸術センター 演奏係
TEL03-5685-7700

は定信ゆかりの楽器が数冊あつて、そこには「楽亭文庫」の印が認められる。その中に大変珍しい唐楽和琴譜を見つけたので、今度のコンサートではそれを参考に、管絃に和琴を加えた演奏を試みる。

恐ろしい形相の面をつけ、桴を手にして舞う「稜王」の舞踊は勇壮闊達にして華麗である。通常よく上演される「稜王」は略式のもので、トータルで十五分くらい。これを全段すべて上演するもの、すなわち洋楽でいうところの完全版は「一具」といい、三十分くらいになる。略式版では「臼搦手」「小藤間突手」などの独特の舞踊や、無言のなかに舞人が舞い始める「囀」という部分は見ることができない。一具形式は、舞人にとつても楽の演奏者にとつても格式の高いものとされていて、上演はきわめて稀である。

さらに、「楽器シリーズ」という枠内でのコンサートなので、楽器の修復家や装束の製作者の方にも舞台にあがっていただいてインタビューを通して、美術館所蔵の楽器の素晴らしさについてわかりやすく説明していただく。演奏は東京芸術大学教官(宮内庁式部職楽部と兼任の方も多い)および邦楽科雅楽専攻学生による。

(たきい・けいこ/演奏芸術センター助手)